

遺伝と発生をつないだ文化人

C.H.Waddington (1905~75)

少し以前に、わが国でもかなりの読者を得ていたダンパー(英)の著作『科学がきらわれる理由』^{註1}のなかで、インテレチュアルという語が、一般の慣例としてけっして科学者に対しては用いられないと述べている。日本語では文化人という、いささか定義づけの難しい、しかし、誰もが知っている便利な言葉があるが、これを使うなら、科学者は文化人の外、という表現がダンパーのいうところにあたる。このことは日本の社会通念としては、昔も今もまったく変わらない。

1950年代の終わり頃に、私にとっての初めての外国(スコットランドのエジンバラ)での、私の留学時代の親しきボスであり、その後もかなり長く接することになった、ワデントン^{註2}は、いわば英国の伝統的な知的クラブの一員たる以外の何者でもないような文化人的キャラクターの持ち主であり、そのぶんだけ当時の日本の科学者の通念であり、かつ道徳律ともいべき実験・観察に身を捧げる勤勉さとは無縁であった。これは、科学の先進国と後進国の科学者としてのありようの違いであり、これから受けた私の印象は、結局は今もってしても拭い去られていないと白状する。

この巨大なる知的文化人は、生物学に何を残したか? もっとも重要で、先見的、かつ画期的であったのは、実験ではなくて、主として概念的、哲学的、思索的に、遺伝学と発生学は本来的に同じ主題を研究しているものであり、両者は統合されねばならないという預言者の提言を行なったことであった。

今からみると、じつにおかしなことなのだが、1940年代までは、両者は隔絶した分野なのであって、思想的にも人脈的にもまったく別の独立王国をつくっていたのだから、この見解の大胆さに驚く。しかも、この大胆な宣言



宣言時代のワッド。

の最初のといべきものは、今のわれわれの常識である研究論文によるものでなく、『オルガナイザーと遺伝子』^{註3}という40年に刊行された著書によっているところが、彼が技術的な科学者でなく文化人たるの色彩の持ち主であったことの面目躍如だといえる。(次号へ続く)

(おかだ・ときんど / JT生命誌研究館館長)

註1: 原著は1956年刊。日本語訳は松浦俊輔, 97年青土社刊。

註2: C.H.Waddington。インドに生まれ、地質学を学んでケンブリッジ大学卒業後、発生学に興味を移して研究。1947年エジンバラ大学動物遺伝学研究所所長となる。友人、研究仲間は彼をワッドと呼んだ。

註3: C.H.Waddington, "Organizers and Genes" Cambridge at University Press, 1940.

①エジンバラ大学動物遺伝学研究所の入り口に立つワッド。右は岡田夫人(1959年)。

②エジンバラは、今は亡き、スコットランド王国の首都たるの威容を1950年代は保ち続けていた。それを象徴するかのとき、ウェーバリ駅。左上の建物は、なんと郵便局。岡田が撮影(1957年)。

③ワッドは古都エジンバラで、当時としては異例といべき国際的な研究仲間を集めていた。今も名高い街の中心であるプリンセス・ストリートにおけるロマノフスキー(チェコ、写真左)、ハサウェー(米、右)。岡田が撮影。

